

# 2018 年度 非文字資料研究センター 第 3 回公開研究会

## 「戦前の青島と日本」を巡る円卓会議

日 時：2018 年 11 月 30 日（金）  
場 所：神奈川大学横浜キャンパス 17 号館 215 号会議室  
主 催：神奈川大学非文字資料研究センター 租界・居留地研究班  
【報 告】

- 1 日本占領期の青島と日本人 修斌（中国海洋大学）
- 2 青島と中国人の文化活動 中村みどり（早稲田大学）
- 3 青島と日本一学校と教育 山本一生（上田女子短期大学）
- 4 青島と日本軍政署 単荷君（総合研究大学院博士課程）

### 【コメント】

大里浩秋（神奈川大学名誉教授）、菊池敏夫（神奈川大学）

## 2018 年度非文字資料研究センター 第 3 回公開研究会「戦前の青島と日本」 を巡る円卓会議の報告

孫安石（非文字資料研究センター研究員）

神奈川大学非文字資料研究センターでは、東アジア開港場と日本との関係についての共同研究（以下、租界・居留地班）を継続的に行ってきた。その成果の一部は、大里浩秋・孫安石編『租界研究新動態（歴史・建築）』（上海人民出版社、2011 年）として刊行し、近年は上海を中心とした租界研究に集中してきた。但し、中国のその他の租界地区に類似する各地域、例えば大連、天津、青島、漢口、蘇州、広州などの都市については、なかなか本格的な検討を加えることができず、多くの方から指摘をいただいていた。そこで、今回の円卓会議では、「戦前の青島と日本」との関連を取り上げた研究成果を集約し、今後の租界・居留地班の目指すべき研究方向について議論を深めたいと考えた。

以上が、今回の公開研究会を開催した趣旨に当たるものであったが、幸い、青島の中国海洋大学の修斌（歴史）、早稲田大学の中村みどり（文学）、上田女子短期大学の山本一生（教育学）、総合研究大学院の単荷君（社会学）（敬称略）という多彩な顔ぶれで、各研究分野における貴重な研究成果を学ぶ機会であったので、以下、その内容を簡単に紹介し、幾つかの感想を述べてみたい。

まず、修斌の「日本占領期の青島と日本人」は、青島



修斌氏

以来、1898 年から 1914 年にはドイツによる膠州湾租借の時代を経て 1914 年には日本の占領を、1922 年には中華民国の統治に帰属し、日中戦争が起きる 1937 年には再び日本の第二次青島占領期に入る、という極めて明確な統治主体の交代を、その最たる特徴として認めなければならない。

修斌の紹介によれば、

近代史の歴史の変遷について触れながら、とくに日本の第一次青島占領時期の人口の急増に注目すべきであることを語るものであった。

青島の近現代史の歴史は、清末の 1891 年に正式な青島市制が始まって



写真 1 「戦前の青島と日本」公開研究会のポスター

1911年には僅か312名であった青島の日本人は、日本の青島占領が始まった翌年の1915年には約4000名へ、そして、1922年には約21000名まで（袁栄叟等編『膠澳誌』成文出版社、民国17年本の影印）に激増していることをみてもその急激な増加ぶりをうかがうことができる。人口の急増が地域社会に及ぼす影響は、例えば上海の共同租界の人口変動にも共通するもので、上海の場合は太平天国の乱を逃れた難民の租界への流入、そして、日中戦争を前後した時期の日本人人口の急増が知られている。修斌の報告ではもう一つ表として「青島関係檔案一覧表（1949年まで）」が紹介された。なかでも特に注目されるのは、青島地方法院と裁判関連の資料が青島市檔案館に保存されていることであろう。

【表一】「青島関係檔案一覧表、一部」

分類番号	檔案名称
A0038	山東高等法院第二分院
A0039	青島地方法院
A0040	青島高等地方法院
A0041	青島地方法院
A0042	青島監獄
A0043	山東高等法院第二分院
A0044	青島地方法院
A0045	青島高等特種刑事法廷
A0046	青島警察局（指紋）
A0067	青島地方法院（1922－1929）
A0068	青島地方法院（1929－1937）
A0069	青島地方法院（1938－1945）
A0070	青島地方法院（1945－1949）
A0071	青島高等法院

これら檔案資料の分類番号の変更は、さておき、『青島市檔案館指南』（中国檔案出版社、1998年）の「第二章 館藏中華人民共和國建国前檔案紹介」の「司法、軍事機構檔案」の分類と檔案名称が一致していることから檔案の整理が進んでいることが分かる（閲覧できるか否かは不明）。

中村みどりの報告「演劇・映画人洪深と青島」は、江蘇省の出身として生涯の後半を青島で過ごした洪深（1894～1955）を紹介するものであった。洪深は、上海の南洋公学をへて、北京の清華学校理科に進学し、演劇の舞台に立った後、アメリカへ留学した時にも演劇



中村みどり氏

活動に関わった。その後、上海に帰国したあとも、洪は、復旦大学で教鞭をとりながら演劇に関わり、1934年からは青島を主な活動拠点として活躍することになる。

中村の報告は、洪深が国立山東大学時代にイギリス文学史、演劇概論、戯曲選読などの講義を担当しながら、引き続き山東大学活劇社の組織に深く関わったことや『青島民報』が副刊として発行した「避暑録話」にも多くの文章を発表したことなどについて触れたものであった。



写真2 公開研究会の様子



山本一生氏

次の山本一生の報告「青島と日本一学校と教育」は、青島日本中学校という学校教育を通して、青島と日本との関係を探るものであった。氏によれば、青島の第一次日本統治期に入ると日本人が急増したことでまずは小学

校の設立が急がれ、続けて中学校の設立が必要になった。この時期に青島守備軍司令官を務めた大谷喜久蔵の日記によれば、当初は中学校と職工学校のいずれが必要かをめぐって様々な考え方があったという。ところが、大谷は小学校の生徒が1000名以上になり、中学校への進級を希望する学生が多かったことなどを根拠に1917年4月に青島中学校の設立を決心することになる。

また、山本は、青島中学校の開設時の教員全員が広島高等師範学校の出身であった理由として、当時の青島と日本の窓口的な役割を果たした広島の宇品との関係を



指摘した。



単荷君氏

単荷君の報告「第一次占領期における青島軍政署の都市開発政策」は、日本人新市街「新町」の形成を分析、紹介するものであった。

単は、日本の青島占領によってもたらされた大きな問題は、人口の激増

による住宅の不足と、いったん賃貸された住宅をさらに高価で、また貸しする不正行為の頻発であったことを指摘した。中でも、青島軍政署を悩ませたのが、水商売に従事する売春宿が市内に散在するという問題であった。青島軍政署は、風紀取り締まりのためにこれら売春業者を一つの区画に集中させる必要があり、そこで、登場したのが「新町」の整備であった。

単の紹介によれば、新市街地の選択をめぐるのは、青島守備軍側が台西鎮に新市街地を建設することを推進したが、頓挫し、最終的には三業（芸妓置屋、料理屋、待合茶屋）の営業が許可された「新町」が青島に登場することになったという。青島軍政署は、1915年9月に告示第21号、署令第1号、第2号をもって芸妓屋と酌婦に対する取り締まりを強化し、これら三業の営業体制は結局、1945年の敗戦をもって終焉を迎えることになる。



写真3 公開研究会の集合写真

明治日本が日清戦争の勝利によって台湾を獲得し、朝鮮、中国への進出を拡大していく過程が、日本人の海外進出の歴史と重なることは周知の通りで、その末端において多くの犠牲になったのは、日本人婦女子、その中でも社会的な地位が低かった西洋人の妾や酌婦や娼婦などの人々であった。これは20世紀以降、日本の植民都市として発展する青島に限ったことではない。

例えば、明治初期の日本政府が上海領事館を設置したときに、最初に取り組むべき課題の一つには、売春に関わる人々の取り締まり業務であり（アジア歴史資料センターの「外務省在上海総領事へ令シ売淫罰則并売淫懲罰処分更定」、A15110460200）、20世紀に入ってから上海の日本人社会は、依然として「売春」という社会問題に直面していた。

上海で発行された日本語新聞『上海新報』は「地位を明らかにせよ」の中で、「日本人の上海に在留するもの其の数男女合わせて六〇〇、七〇〇名の多きに及び其の中の女子の数殆ど全数の二分の一を占め、なすところを見るに二、三を除くの外、皆身を洋人又は清人に托すものなり、それ身を売る醜業たるは人皆これを知る」と指摘し、上海を代表する日本旅館の「東和洋行」が「自今いらい上等の顧客と主として御婦人にては御夫婦連の外は相当の御添書きにでも有之の外、あいまいなる婦人は一切御断り申すことと致し候」としていることから、売春問題の根深さが分かる（第21号・第22号、1890年。上海については、『年報 非文字資料研究』第10号2014年に掲載の孫安石「清末上海の日本語新聞『上海新報』の世界」を参照）。これら売春の問題は、植民地都市の青島においても例外ではなかったことだろう。

以上、4名の方の報告を駆け足で紹介してみたが、私の主観的な理解や知識によるもので、的確な紹介になったのかどうか自信がない。日本における青島の社会経済分野の先行研究としては、本庄比佐子『日本の青島占領と山東の社会経済—1914-22年』（東洋文庫、2006年）が知られ、同書によって日本の青島占領と山東地域の経済活動の全体像が初めて紹介され、青島軍政署・守備軍が刊行した文献の発掘も画期的に進んだと言っても良い。今後は青島の都市研究、そして、青島と日本人社会との関連について、新たな研究成果が組まれることに大いに期待したい。